古代ゲルマン語“Wald”への宗教史的視点 I

藤本　武

(英)　Religious Angles to the Old Germanic Word “Wald” I
by
Takeshi Fujimoto

(独)　Religionsgeschichtliche Aspekte zum gemeingermanischen Wort ”Wald” I
von
Takeshi Fujimoto

はじめに

1996年春、十余年住みなれた蓼科から新潟へ移転する時、蓼科の森をあらためて意識した。私にとってこの森は何なのだろうと。そこでドイツの森“Wald”への問いをすることによってこの問いへの道を試みることにした。私にとって森といえば、以前数年を過ごしたドイツの森がまず先に浮かぶからである。それに次に日本の森にとりかかる予定でもある。はじめに、日本語の森という語句と古代ゲルマン語“Wald”という語句を調べることで、この“Wald”へのとりかかりの準備とし、次に“Wald”と古代宗教の係わり、“Wald”と中世のキリスト教の係わり、そして“Wald”と近世、近代の宗教思想の係わりで、この“Wald”の変遷を追究することによって、私にとっての森とは何かという問いへの答えを探ってみるものである。今回は枚数の関係で、古代宗教の項までとなった。第II部で、中世のキリスト教の自然観、その救済史的意義づけ以後を扱うことにする。

1．森という語句について

1－1　日本語の「もり」、森、林、杜、山、森林について

古代ゲルマン語“Wald”について述べる前にそれに対応する日本語の森について字句の意味を明らかにしておく必要がある。

「森」とは「多くの樹木がこんもりと茂っているところ」の意味で多くの辞典に共通している。「多くの樹林」とは、「森」が三木の会意で、「三」を「多い」という寓意に解釈することから派生したのであろう。それとの対比で、「林」は二木であるから、「林」は「森」より木が少ない「平地林」を指す場合が多いとされている。所が「林」にしても「物事の多く集まったところ」という意味をもっている。したがって、むしろ、「森」はもともと、日本の古語、「もり」、つ

まり「盛りあがる」、「盛りあがっている所」に由来し、「林」は同じく日本の古いことば「生（はやし）」、つまり、「生えている所」に由来するとの見方が捨てがたい。

梅原猛は自著「森の思想」の中で、日本人には二つのタイプがあったことを指摘して次のように述べている。

「最近の自然人類学の研究によりますと、縄文人と弥生人は人種がちがうというのです。どちらもモンゴロイドですが、縄文人は古モンゴロイドといって、古いタイプのモンゴロイドです。……あとから日本列島に入ってきた弥生人は新モンゴロイドで、……こういう二つのタイプのちがうモンゴロイドが日本列島のなかで住み分けているという状態があるわけです。だいだい、近畿地方は弥生人、新モンゴロイドのタイプの人が多くて、東北を中心とした日本の北方地方に縄文人、古モンゴロイドのタイプが多い。北陸、山陰、近畿地方では熊野地方、四国の太平洋側、九州の南部から沖縄にかけての地域に古いモンゴロイドの人が多い。一方弥生人、新モンゴロイドのタイプの人は韓国、中国の人に近い。そして古モンゴロイドのなかで、最も縄文人の形質を多く残しているのが、アイヌあるいは沖縄の人たちであるということも明らかにされています。」と。[(1)]

この説に従えば、沖縄の古語は、東日本を中心にして発展したブナ林文明（狩猟採取文明）の縄文文明を根にもっている可能性が大きいことになる。沖縄古語大辞典の「森」の項をみると、「森、杜、ムイ、①高く盛り上がった所、『おもしろさうし辞典』には『もり』は高くなったその形容からからきた名称とある。漢字を宛てると『森』よりは『盛り』がふさわしいイメージである。この中に御嶽（聖所）があることが多いので、しだいに『もり』も聖所の意味をも示すようになった。②聖所、拝所、日本古語でも『もり』は神社などのある神域で、神霊の寄りつく樹木が高く群がり立った所、（日本国語大辞典）」とあり、語形として、「ぶん、ふーいー、むい、もり」などがしめされている。[(2)]

「広辞苑」の「森」の項には「（東北地方では）」丘」と記述されている。日本地図の四国の太平洋側の高知県には「森」の名のついた「山」が多い。こちらはかなり高い山に「森」がつけられている。例えば、綱附森、甚吉森などの名がある。これら縄文人が多く住むといわれる地方の「森」は「盛りあがった所」の意味に用いられた場合が多くみかけられる。

更に「日本方言大辞典」の「森」の項には11の使用例が示されていて、それぞれに用いられる地域が挙げられている。「5．こんもり茂った山頂、奈良県吉野郡、7．塚、墓　青森県三戸郡、8．土地の小高い所、丘、青森県津軽、南部　秋田県鹿角郡　雄勝郡、（もりこ）青森県津軽」と記されている。いずれも梅原猛の古いモンゴロイドの住む地域に多く用いられる「森」の意味である。[(3)]

これらの事例からも「もり」を樹木が茂って盛り上がった神聖な場所」という意味で縄文人が用いていたことが推察される。ただ沖縄古語が暗示しているように、樹木を含まない「土が盛り上がっている所」を指すこともありうる。しかし縄文時代の日本列島が森に覆われていたことを踏まえると、「盛り上がった所」は通常樹木を含んでいたと考えられる。そうすると「もり」は樹木によって「盛り上がっている神聖な所」とみられていたことになる。加えて、古代の神社では、神殿というような建築物はなく、森そのものが神社、あるいは御神体とされていた。森そのものが神の臨む所。樹木、または柱を、そのままで神の降臨する御神体とみるのは、縄文時代の思想である。たとえば、古い起源をもっとみられる長野県諏訪神社の御神体は御柱である。この御柱は縄文時代にブナ林文明があった八ヶ岳の森から運ばれてくる。沖縄の御嶽（ウタキ）の場合、巨木そのものが信仰の対象であった。

「杜、社、社」について、

これらの諸語句も「モリ」と読まれる。時代別国語大辞典によると、「社は、神の憑りつく木や林」の意とされ、参考として、「この意味は、樹林に神が来臨されるとする考え方の反映である。社は、助詞コソを表現する新仮名として万葉に用いられ……社（コソ）は丁度日本語の『もり』にあたるような古朝鮮語ではないかという説がある。……朝鮮の地名「居曽山（コソムレ）」（欽明記23年）などから規定するものである」とある。[(4)]「出雲風土記秋鹿郡」には「神社」、「新撰字鏡」に「杜塞ぐなり、閉ぎ塞ぐなり、毛利、又佐加木」、「名儀抄」に「社ヤシロモリ、杜フサゴ、モリ」とみえる。「杜、社、社」は古朝鮮語と深く係わり、弥生時代の思想の一端を形成し、森を神と人との対話をするための神聖な空間すなわち「聖域」とみる言葉であったといえる。当時韓国には森や林や山が神の降臨する場所であるという多神教的思想があった。その思想が「杜、社、社」の語句を通して弥生人に導入されたと考えられる。今日、いわゆる「鎮守の森」、神社を取り囲む「杜の森」として残っている。

これと同時に弥生時代に「むれ」と読む古朝鮮語の「山」が導入される。これも縄文の「もり」にあたる語で、樹木のある山、または丘で、聖なる場所を意味する言葉であったとされている。今日も「山」は日常会話や文章の中で、しばしば「森」と同じ意味に用いられ、しかも神聖な場所とみられている。一般に「森」が「山」と不離一体のものであるという日本人の意識を形成したのは、弥生人、つまり、新モンゴロイドがその後の日本人の主流になったことに係わりがあると考えられる。従って、「森」は「山林」を指すのが当然のようになり、それに対して「林」が平地林を指すようになったともいえる。更に、森や林や森林、それら全てを総称して山と表現する場合もある。

その他、「森」は憲意的な表現として用いられたり、文学的表現として使用されることもある。「林」は特定の樹種の樹木が集まったものを、例えば、「くぬぎ林」とかのように用いらることができる。

最後に「森林」は、一般的に学術的表現、法律に規定された用語として用いられるものである。

これらを綜合すると、古代ゲルマン語“Wald”に相当する日本語の語句は、「もり」又は「森」と思われる。ドイツ語の「Forst」はすでに中世から用いられ始めるが、これに相当する日本語は「森林」であろう。この「森林」は明治時代以降ではあるが。それらに対して日本語の「社、杜、社」に対応するドイツ語は「Hain」とみられる。そこで次に古代ゲルマン語“Wald”を中心にドイツ語の森の語句について述べてみる。

1－2　古代ゲルマン語“Wald”とヨーロッパ語系の「森」に相当するその他の語句について

ゲルマニアはギリシャ、ローマ世界の影響を有史以来受けている。それは「森」に関しても同様である。古代ゲルマン語“Wald”に入る前に、ギリシャ語、ラテン語の「森」に相当する語をみてみる。

ギリシャ語で「森」を意味する言葉は、「ὕλη＝hyle」である。これを有名にしたのはアリストテレスの「自然学」である。この「自然学」の中で、自然の本性を規定して、形相と資料に分け、この資料に相応しい言葉を探したアリストテレスは、この「ὕλη＝hyle」を使った。「hyle」は「森」を意味するギリシャ語である。この森（hyle）に哲学的意味を最初に附与したのはアリストテレスである。[(6)]

ギリシャ語の森（hyle）に対応するラテン語は「silva」である。その古い形は「sylua」となって、音声的に「hyle」により近くなっている。[(7)]ちなみに、ローマ人はアリストテレスの「資料」を「materia」と訳した。ギリシャのアリストテレスは自然を規定する資料に森という生命力を

持った言葉を敢えて用いた。その自然である資料をローマ人は第一義的には物質という意味を持つ「materia」とした。自然を物質と判断する哲学思想が背後にあるとみえる。更に「materia」は全く森と係わりがないわけではない。第二義的にこの「materia」は樹木の部分の利用できる木材を意味する。つまり森はローマ文明のために用いられる物質、木材として規定されたともいえる。それにしても「materia」の語根、樹木の「根」から由来しているのだが。[8]

ラテン語の森シルヴァは、ローマ建国の父ロムルスとレムスの「育った森」をも意味する。この兄弟は「育った森」シルヴァにみずからの都市を建てた。ローマ神話で、ロムルスとレムスの育った森を守る神は「silvanusシルヴァヌス」であり、この神は森と語源は同じである。同時に森の神であり、町の外側に広がる野生の神とされている。

文明研究家ロバート・P・ハンスンは「森の記憶」の中で、ローマの森について、次のように述べている。「ローマではレス・プブリカ（res publica＝共和国）と自然の境界線は、人の住まない森の端とされていた。この人の住まない森は、古代ローマ法ではレス・ヌリウス（res nullius＝誰にも属さない）と定められていた。ローマが支配する領域は‥‥ローマの法律の及ぶ領域‥‥聖なる都市だけでなく、貴族の所有する田舎の地所も含まれたが、それでも森の境界を越えることはなかった。森は『誰のものでもない場所』の意味であるロクス・ネミニス（locus neminis）と広く呼ばれていた。（恐らく、ラテン 語の「nemus」すなわち「森林」という言葉さえ、『誰でもない者』という意味を持つネモ「nemo」に由来するだろう）。都市と森はこのように厳密に区別されていた。森のなかでは人はネモ「nemo＝誰でもない者」なのだ。森の周辺が都市と自然の境界をさすようにレス・ヌリウス（res nullius＝誰にも属さない＝森）はレス・プブリカ（res publica＝共和国）と対峙した。」[9]

ラテン語においては、「森」を表現する言葉は、神的な意味を有し、避難所である森シルヴァと、法の及ばない場所であり、それ故に誰でも係われる地域である森ネムスとがあり、この二つの森は文明を象徴する都市ウルプスに対峙していた、といえる。聖なる都ローマは文明を意味した。この文明との対比に於いて、シルヴァとネムスが派生したとみられる。従ってシルヴァとネムスには文明化されていない、未開の、野生の地という意味が常に伴うことになる。

シルヴァが宗教的、神話的色彩を帯びているのに対して、ネムスは法的、儀式的色彩をもっている。古代ローマの資料や中世時代初期の法令の中に、林や森林地をさす言葉として「ネムス」が用いられている。そうすると森を人間社会とその法の領域外に存在するものと描写しがちであるのは訂正しなければならないことになる。古代ローマの資料において法の及ばない場所として森ネムスが規定されていたとしても、必ずしも都市文明によって管理されていなかったことを意味するものではない。ヨーロッパの多くの森は中世時代の早い時期からすでに法の管轄のもとにあった。[10]

「Forst」と「Wald」について

ドイツ語の森林「Forst」という言葉も、元来法律用語であった、と考えられる。ヨーロッパ諸言語に見られる同族語（foresta、forét、forestなど）と同じく、「Forst」はラテン語の「foresta」に由来する。このラテン語はメロヴィンガ王朝（フランク王国の王朝名、5世紀末から751年まで）時代になって発生した。「foresta」という言葉が最初に記録されるのは、ロンバルト人（東ゲルマンの部族）の法律においてとカール大帝（フランク王国王、741～814、800年ローマ皇帝即位）の法令のなかであり、そこでは森林一般ではなく、狩猟のための王室御猟林をさす言葉であった。この言葉の起源は、おそらくラテン語の「foris＝外側の意」からきたと考えられている。「forestare」というラテン語の動詞は「入らせない、立ち入り禁止にする、

締め出す」といった意味をもっている。[11]「foresta」が辞書に載るメロヴィンガ王朝時代になると、王たちは広大な御猟林に住む野生動物を保護するため、それはまた王室の重要な儀式である狩猟の存続を企かるためでもあったが、一般領民の森への立ち入りを禁ずる措置をとった。このように森林「Forst」＝ラテン語「foresta」は勅令により立ち入りを禁じられた土地を意味する用語であった。

イギリスのジョン・マンウッドは1592年「御猟林法についての論稿、現行の法律についてのみならず、森の起源と始まりについても記す。さらに、森とは何であり、猟場、猟園繁殖地とはいかに違うのか、および、その両者に付随するあらゆる事柄について」という長い題名の有意義な論文を記している。エリザベス女王時代末期の法律家で王室御猟林の猟場番でありかつ判事であったマンウッドはその論稿の中で、「Forst」と「Wald」についての定義を明確に述べている。それを要約すると以下のようにである。

「サクソン人の時でさえ、数多くの大樹林が破壊されずに残っていた。それらは狼や狐が住む森林あるいは樹林という意味でヴァルトWaldと呼ばれたが、やがて紀元959年サクソン王のエドガーにより濫伐され、残ったものはごくわずかになってしまった。ウェールズの民は年毎に狼の皮をサクソン王に貢いでいたが、そのため狼のような猛獣は姿を消してゆき、残ったのは猛獣と美味の獣であった。そこで、この地の王たちはそのような動物の保護に心をくだき、一定の森林地や場所を特別な地域に指定して、誰もそれらを傷つけたり殺したりできぬようにした。このようにして、上述の場所がフォレストForestになったのである。[12]」更に、「シルヴァという言葉は往々に森forestと訳されるし、サルトウスについてもそうだ。だが、そのどちらも森forestを意味する適切な言葉ではなく、ただ樹林ヴァルトを意味する言葉なのだ[13]」と。

マンウッドによれば、ヴァルトは破壊されずに16世紀に至るまで残っている原生林であり、ラテン語のシルヴァまたはサルトウスに相当し、狼や狐のような野生ような野生の猛獣の住む森林あるいは樹林である。それに対して、フォレストとは、「樹木が茂っていてそこに鹿やその他の動物が住んでいるからといって、樹林がすべて『フォレスト』だとはいえない。国王によって特権を与えられ、平穏で動物たちが保護された場所でなければならない」と定義している。ビュデの「古典文献学について」からの語句を引用し、マンウッドは「フォレスト」に対応するラテン語は「sylva sacrosancta」か「saltus sacrosanctus」――神聖不可侵の樹林――であるとした。マンウッド言わすれば、「フォレスト」は自然の聖域（サンクチュアリー）であって、この王室の森は教会が助けを求めて逃げ込んで犯罪者や逃亡者を受け入れたように、野生動物野生植物の避難所を提供する役割を果たすものである。「フォレスト」は「聖域（サンクチュアリー）の思想と結びついているといえる。[14]

次に別の角度からヴァルトに迫ってみることにする。ドイツ西南部に広がる「シュヴァルツヴァルト」について、1981年 B．ベッシュは、その地名の由来を以下のように述べている。

「シュヴァルツヴァルトという名前が最初に出現する記録は、ザンクト・ガレン（スイス）の修道院の868年の文書の中である。後、この地名はザンクト・ブラジェンやザンクト・ペーターの修道院の文書にも見られるようになる。これはこの地名がある修道院によって銘命されたというより、すでにアレマン人（ライン川の西側に定着したゲルマン族の一部族）がこの名を用いていたとみるべきであろう。しかもシュヴァルツヴァルトという名は１箇所だけでなく、南ドイツからスイスの各地にあるといえる。更にシュヴァルツヴァルトの名前や類似の名前はドイツ語以外の言語にもみられる。そのことは他の言語がこれを採用したとも考えられる。これらより、アレマン人定着以前の先住者ケルト人のシュヴァルツヴァルトに相当する言葉をゲルマン語に翻訳したとの考え方もできる。従ってその名は９世紀になって初めて出現したのではなく、すでにケ

ルト人によって名づけられ、それをゲルマン人が継承したとみることができる」としている。[15]

ケルト人は紀元前1万5千年頃活躍したクロニヨン人を先祖の核とし、紀元前千年頃東方から移動してきた人々とが融合し、中部ヨーロッパの各地に定住、農耕をおこなった森の民であった。ケルト人という言葉はすでに紀元前5世紀のギリシヤの文献に現れている。このケルト人にまで、何らかの形でヴァルトは溯かのぼり得る可能性が示唆されている。

グリムのドイツ言語学辞典の森の項について要約する。

「Wald」はギリシヤ語の「silva」に相当するゲルマン共通基幹語である。この言葉はゴート語のみに典拠するものではなく、ゴート語である証拠は全くない。ただゴート語の「Walþus（叢林の意）」と発音がほぼ同じである。だがギリシヤ語の「ὕλσος」＝ドイツ語のHain（囲われ手入れされた森林）とは類似語ではない、理由は“W”の欠落である。「gwalþu（芽生えた、育った）」に由来する古代ゲルマン語の「walþu（切りとられた若木）」は類似語であろう。「Wald」の語源は不確であるが、「wiese（開かれた場所）」、ドイツ語のHainに相当するラテン語の目「ルークス」、これらは、光の意だが、これらの概念が先にあり、それに対比される「未だ開かれていない」という意味の概念として「Wald」が派生してきた可能性が大きい。中高地ドイツ語の「Wald」の二義には「未だ耕作されていない、未開の、野生の」という意味があることを指摘している。[16]

グリムによると、「Wald」はゲルマン諸族共通の言語であるという。そうすると「Wald」はゲルマン語派がまだ西ゲルマン語、東ゲルマン語などへあまり分岐していない時期にすでにあったことを意味する。更にケルト語派はゲルマン語派に最も早い時期に影響を及ぼした語派といわれ、その時期は、この時期であった。その影響は、言語学的な本来の親近関係にあるものによってなされたのではなく、むしろ一般的な文化的影響によるものであると考えられている。[17] この「Wald」はケルト人と深く係わりを持っていないとは断言できないだろう。しかし「Wald」がケルト語のそれに相当する言葉に由来するという、否定の証拠も、肯定の証拠も現在では全くない。注「walþu」は宗教儀式に用いられた。

次に問題となるのはグリムの「Wald」の語源についての考え方である。耕作され、開かれたという概念が先にあり、それとの対比で、未開の、未耕作のという概念が派生し、森という語句が派生したという見方である。これはグリムのロマン派の言語学者としてのドイツ啓蒙思想に基づく文明論の展開であると私には思える。この文明論はギリシヤ、ローマ以来の文明観であり、ヨーロッパにおいて発展し、20世紀になり、シュペングラーの「西洋の没落」によって示された文明理解である。文明は光である。光は上から来る。その光は開かれた場所に臨むという文明観である。この文明観に立脚すれば、wieseやlucusやkulturが先行し、森はそれとの対比としての派生に過ぎない。このドイツロマン派の文明論をグリムは抜け出していない。ケルト人の文明観、古代ゲルマン人の文明観は全くそれと異なるものであるといえる。その文明観は、文明は光である。光は上から来る。ここまではギリシヤ、ローマの文明理解と同じであるが、それに続くものが全く異なる。その光は森や樹木に臨むという文明観である。これに立脚すれば、文明は自然を通して与えられることになる。従って、森や樹木が文明として先行し、それに対比されるものとしての概念「開かれた場所」が派生させられてくる，と見るのが適切ではないだろうか。

従って、これらから総合すると、「Wald」は、ギリシヤ、ローマ文明の影響を多分に受けていることは否定できないにしても、ケルト人や古代ゲルマン人の概念に基づく言葉であると考えられる。

この「Wald」は太古の昔、広大な原生林としてヨーロッパ中に拡がっていた。それがどのような変遷を経て今日の状況になってきたのか。この変遷を促してきたものはなんであったのかを

宗教史的視点を通して扱うことにより、自然と人間の係わりを問いなおしてみたい。今回は枚数の都合で、古代までをその対象とすることになった。

2．「Wald」に文化的宗教的影響を及ぼしたケルト人の樹木信仰

ケルト人は先史時代のクロマニヨン人を祖として幾世紀にもわたってガリア地方を中心にヨーロッパに住んできた人々と、東方から紀元前千年頃西ヨーロッパに侵略してきた人々との融合によって生まれた人々である。ギリシア語で「ケルトウ人」と呼ばれたその人々は幾つかの部族にわかれていて、ギリシア人はその実態をつかめぬままにこの言葉を用いていた。ケルトの諸部族はアルプスの北側中部ヨーロッパの中心部に住み、その領地はセーヌ川、ムーズ川、ライン川中流の地域から、ドナウ川の上流にまでおよんでいた。ケルト語という共通の言語を話すこれらの諸部族は紀元前８世紀の初め当時新しい金属であった鉄を用いるようになる。ローマ帝国の時代になると、ケルト人の一部であるガリアに住む人々は、ローマによってガリア人と呼ばれるが、そのガリア人自身は自身をケルト人と呼んだ。ガリアとはローマ人が「ガリア・キサルピナ」と「ガリア・トランサルピナ」と呼んだ。ジュラ山脈から発し、ヨーロッパを従断して北海に注ぐライン川の西側の広大な地域のことである。そこには樹令何百年にもなる樫の大樹林「古生代の森」が広がり、その中の所々に耕地が見られ、ローマ人が「長髪のガリア」と呼んだ人々が住んでいた。ケルト人は森を秩序だてて開拓した。深い森，峻厳な山、中部ヨーロッパの森や山は人を寄せつけなかったと見られがちだが、実際にはこれらの広大な森林の中には街道が開かれ、抜け道もあり、おびただしい数の馬車が列らなって通行していた、という[18]。紀元前52年アレシアの戦いで、ユリウス・カエサルがガリアを征服して以後、ガリアはローマ化する。ガリア人はラテン語を用いるようになる。これまでがケルト人としての時期といえる。

文書によって登場するガリアはローマによる征服以来のことで、ローマ化したガリアは征服者の生活様式、言語、文字を受けいれ、本来の個性を失ってしまった。ガリアのケルト人は先史時代から有史時代への移行期の人々で、馬に乗り、豊かな金髪で力強い大男、ひげをたくわえ、ただひとつ天が頭上に落ちてくる以外何物も恐れなかった、という[19]。

ケルト人の宗教

Ｊ．Ｇ．フレイザーの「金枝篇」はケルト人の信仰をよく伝えている。それによると、「アーリア系のすべての大ヨーロッパ民族が樹木崇拝を行ったことは、明らかに立証されている。ケルト族の社会のドルーイド僧団の樹木崇拝は誰にもよく知られており、聖所を意味する彼らの古い語は、その起源と意味とにおいて、今なおネミという地名のうちに残存している森林または林間空地を意味する“nemus”なるラテン語と同一であるらしい[20]。」「ガリアのケルト族のドルーイド僧団は、寄生樹とそれが生えているカシワの樹を、この上なく神聖なものと考えた。彼らは荘厳な礼拝の場処としてカシワの森林を選び、カシワの葉を用いることなしには、どんな儀式もしなかった。中略、『ドルーイド』という名そのものも『カシワの人々』を意味するに過ぎないと、確実な権威者たちは信じている」と述べられている[21]。

ネミがラテン語のnemusと同一なのは、ケルト人がローマ化されラテン語を用いるようになったことにより、この用語が元来ケルト人の聖所にケルト語によってそう呼ばれていたかは不明であるが、ケルト人が森のカシワの木のまわりの空地を神聖な場所としていたことは、多くの証拠がある。ドルーイドを「カシワの人々」とみたのはギリシアであり、ギリシア語であるが、そのことについての確かな証拠が存在するものではない。ケルト人の信仰は自然界のあらゆるものに神の霊を認める多神教的な宗教である。宗教生活の中心にある森、その中で一年中葉が枯れず緑

であり、黄金色に輝く寄木樹は、生命と永遠の象徴として聖なるものとされた。山々や水、泉や川、そして湖は豊饒の女神と考えられ、病人たちはこの女神に宝石や装身具、武具を捧げて病気の治癒を祈願した。フランスのセーヌ川を生んだ泉にはセクアナという女神がいて、セーヌという名はこの女神名からつけられているが、このセクアナの泉は紀元前1，2世紀には水の精や大地母神に捧げ物をする場所であり、病者の特別な巡礼地であった。捧げられた木像がセーヌの泉から2千体以上もそのままの原型を保って発見されている。

霊魂の不滅が信じられ、比岸と彼岸とは深く結びつき、霊魂は人間の肉体に宿った後、死後の世界ではよりよいものと考えられた。死後の世界で霊魂は新しい肉体のなかに宿るのだとされた。新しい肉体とは自然界のあらゆるもので、動物、植物、鉱物まで含むものであった。とりわけ森は聖域であり、古い森には太古の昔から棲みついた悪霊や妖精や自然の精霊が出没するとされていた。

ドルーイド神官

ケルト人の宗教的指導者はドルーイド神官である。長い間修業を積み、先祖代々に伝わる占いや神々の儀式を守る役目を持ち、占いによって神の声を聞き、神の声を人々に解釈して教えた。ケルト人は文字を知らないのでドルーイド神官の知識は口伝であった。神官は自身だけの階級である「民族」を作っていて選ばれて一番上に立った部族の長がガリアのドルーイド神官すべてをおさめたが、神官は裁判官でもあり、ケルト人の社会において、最も高い地位にあったといえる。

ドルーイド神官とカシワの木への信仰をめぐる様々な儀式は、前述の「金枝篇」に詳細に述べられている。[22] ドルーイド神官の指導するドルーイド宗教はケルト人の生活の中心であり、ケルト人の文明そのものであった。そのドルーイド宗教の中心は森であり、樹木であり、寄生樹であった。森はケルト人にとり自己そのものであった、といえる。

ケルト人の風習と言語の名残りは、今日もなお、フランスのブルターニュ、スコットランド、ウェールズ、アイルランド等に見られる。ドイツのバイエルン地方もその例外ではない。ミュンヘン近郊、キムゼー湖畔のビールの銘柄に「ケルテン」の名称が用いられている。このように地域的にまとまったある地だけでなく、ヨーロッパ人の心の中にこのドルーイドの名残りがある。それは特に森への人々の想いの中に顕著である。

3．古代ゲルマンの樹霊信仰

聖　森

「『神殿』というチュートン語の研究からグリムはゲルマン族の最古の聖所は自然の森林であったと説明している。[23]」「聖森は古代ゲルマン族の社会では一般的であり、樹木崇拝は今日の彼らの後裔の間からも決して消失していない。その昔、立木の皮を敢えて剝いだ者に対して古代ゲルマン法が定めた物凄い刑罰から推察される。中略　犯人のへそをえぐり出して彼が皮を剝ぎとった痕に釘づけにし、腹わたがすっかり樹幹に巻きついてしまうまで、その樹の周囲を追いまわすのであった。[24]」「古代ゲルマン人の宗教において、神聖なカシワの森林の崇拝は最高の位置を占めていたと考えられ、グリムによれば、彼らの聖樹の主たるものはカシワの樹であった。それは特に雷神ドナルあるいは、トウナル、すなわち、スカンディナヴィア人のトールにあたる神に献げられたようである。なぜならば、ヘッセンのガイスマル近郊で第8世紀にボニファチウスが伐り倒したあるカシワの樹は、『ユーピテルのカシワ樹』（robur Tris）すなわち、古代ゲルマン語では『ドナルのカシワ』（Donares eih）とあったはずの名で異教徒たちに知られていたからである。[25]」

これらの引用はすべて、フレイザーの前述した「金枝篇」からである。「古代ゲルマンの聖所は自然の森林」、「古代ゲルマンの樹木崇拝」「古代ゲルマンのカシワの森林への崇拝」についてのこれらの引用箇所は、「金枝篇」において、いずれも、「ケルト人の聖所」、「ケルト人の樹木崇拝」、「ケルト人のカシワの森林への崇拝」が記述された直後に宛かも同一であるかのように並記されている。その扱いをみるとフレイザーはケルト人と古代ゲルマン人が同一の信仰を持っていたとみていることがわかる。その意味ではフレイザーはケルト人の宗教と古代ゲルマン人の宗教の違いを無視している。古代ゲルマン人特にゲルマニアに定着したゲルマン部族の祖の地がスカンディナヴィアであり、従ってエッダサガに由来するドールの名をフレイザーは指摘をしているものの、ケルト人の樹木崇拝の中心が黄金色に輝く寄生樹にあるのに対して、ゲルマン人の樹木信仰は樫、ナラ、ブナなどの樹木、しかも、森でひときわ高く聳える巨木にその中心があるといえる。そうではあってもフレイザーは森への宗教的な人々の係わりにおいて、ケルト人と古代ゲルマン人との間に大きな差を認めず、森を共に崇拝していたことを共有していたとみていたことは確かである。

カエサルの「ガリア戦記」には当時未開地であったシュヴァルツヴァルト一帯のことが記載されている。現在のシュヴァルツヴァルトを含む「ヘルキニアの森」の幅は軽装で横断しても丸9日間かかる広さがあるとされ、「ゲルマーニアのこの地方の誰でも、60日間の行程を経て森の端まで行ったものがないし、森がどちらから始まったか聞いたものもない。中略、ほかでは見ることのできない種類の野獣が多く棲息している」と述べられている。この「ヘルキニアの森」とは「今日のドイツ中南部の山岳地帯の総称」だと注解にある。(26)

ゲルマニア（今日のドイツ）はガリア地方より更に森林が豊富であった。山岳地帯の全部と東部の全体が森に蔽われていた。北部大平原の南縁のレーヌス地域とアルプスの山麓地帯の若干の渓谷（ライン下流、ネッカー河、マイン河）が開墾されていたくらいである。

「ガリア戦記」より少し下がった紀元98年の作品とされているタキトウスの「ゲルマニア」には、当時のレーヌス（ライン）川畔についての記事がある。「この土地はその姿に幾分の変化はあっても、一般よりすれば、森林に蔽はれて物凄いか、或いは沼地が連なって荒涼たるもの、しかも、ガッリア地方に面する方は湿潤が強く、ノーリクム、パンノニアを望む地方は風がはげしい」(27)ここでいうガッリアはガリアのこと、ノーリクムは上オーストリア地方、パンノーニアはドナウの南という注解がある、紀元1世紀当時このように「Wald」が広がっていたのである。

この「ゲルマニア」のいたるところに、「森の神」あるいは「聖林」の記述がみえる。「森は彼らの全信仰の中心である。それは民族の揺りかごであり、あらゆるものが服従する至高の神の居まし所とされている。」と述べられている。(28)更に「ゲルマニアのくじ占い」を紹介している。くじ占いは、果樹から切りとられた若枝を小片に切り、ある種の印しをつけ、それを無作為にかきまぜ、白い布の上にまきちらし、それらを三たびとり上げ、そこにあらかじめつけられた印にしたがって解釈するものである。(29)

果樹はブナの木材を使用することが多く、印はルーン文字かルーン文字の先駆的符丁と考えられ、ルーン文字はスカンディナヴィアに起源をもっている。ドイツ語の「文字」は「Buchstabe」で「ブナの棒」の意味である。それを「とり上げる＝拾う」はドイツ語で「lesen」、今日この語は「読む」を意味している。更に「書く」の意味の「schreiben」は「掻きつける、彫りつける」の意味をもつラテン語「scribere」からの借用語である。古いルーン文字は3世紀初めから8世紀にかけ広くゲルマン各地で用いられた古文字であるが、呪術的用法を示し、「Rune」という語そのものに「秘密」と「奥儀」の意味がある。これらからも「文字」「書く」「読む」「秘密」などが祭司や家長による占いや予言などの祭儀と古くから関係し、それがブナの木など

の樹木信仰と密接な係わりがあったことが読みとれる。[30]

ブナの木にまつわる伝説も古いものが多くブナの木も神聖視されていた。また豊饒儀式に関係が深いのは、古くから果実としてその実を人間が食料としたからであろう。中世には家畜の餌と用いられたことは文化史によく触れられている。

樹霊信仰

中世研究家の阿部謹也はその著「中世の窓」の中で、ゲルマンの樹霊信仰を紹介している。「ゲルマン人の世界では、ヴェッテとしてとりわけ、オークの木が好まれていました。オークの『若枝をもって誓約をかわす』という言葉がしばしばでてきます。ドイツの言語学者ヘルマン・オストホクはかつて『オークと誠実』という論文のなかで、ゲルマン系言語の誠実Treueという言葉は、インド、ヨーロッパ語の木dreu－woとギリシア語のオークの木drûsとの結合に由来し、誠実（忠実）であるということは、オークの木のように堅固な、という意味によるものだ、と説明しました。英語の真実Trueも木Treeに由来するものだというわけです。古代の人びとは、大地に深く根をおろし、数百年の星霜にたえて立ちつづけるオークの木こそ変わらぬものの象徴とみたのです。このホストホクの説は大変興味深いのですが、最近エミール・バンヴェストはこの考え方に疑問を呈しています。変わらぬ確固たるものという語幹が最初で、それが樹木一般をさす言葉となり、最後にオークと結びついたというのです。たとえその通りだとしてもゲルマン人がその高くそびえる樹木に変わらぬものの象徴をみたことは確かです。[31]」

オークは樫の木で、この樫の木に、ゲルマン人は誠実という概念を結びつけた、というバンヴェストの解釈は、[32]古代ゲルマン人の樹霊信仰をよく表現している、と思える。古来より「森の王」とされ、ゲルマン人の属性をもっともよくあらわす樹だといわれている。ドイツ人に親しまれる苦提樹の方がむしろ古くからあったようだが、苦提樹の優しさとまさに対照的に樫の木には堅牢さ、強さ、森厳さの趣がある。太くたくましい根をしっかりと大地に張り、巨人の腕と思われる枝を左右に大きくのばした太い幹は見るからにゲルマン人の心性を映したものと思われ、この樫の木を神聖視するに相応しい樹と見たにちがいない。

古代ゲルマンでは、樫の森には供儀をおこなう神官のほか足をふみ入れることは許されなかった。暗闇にじっと座った神官は樫の樹の葉からもれる音にじっと耳をすまし、神意をききとった。この樹ほど畏敬の念をもって仰ぎ見られる樹はなかった。力の神で雷神のトールにこの樹は捧げられている。この樹の聖性を犯す者は生命か財産を失わなければならなかった。戦争か平和かという重要な案件を決定する際、ペストなどの悪病がはやった時、樫の樹の下に集まり、供儀を捧げて祈った。神官は潔められた山羊や馬を屠って、血を樫や民衆の上にふりかけ、肉は鍋で煮て、神饌とし、山羊や馬の首を幹に供えとしてぶらさげた。

このような樹霊信仰はキリスト教が導入されても中世初期の段階までは一般的であったが、中世盛期に徐々に森にのみ限定されていった。それをキリスト教の側の資料から見てみると、フレイザーの「金枝篇」で引用したヘッセン近郊の８世紀におこなわれたボニファチウスが切り伐った樫の木についてこう述べられている。「ボニファチウスは古い信仰を捨てて、キリスト教に回宗した人びとが自分の不在中にまた古いゲルマンの樹霊信仰にかえってしまい、雷神トールの樫の木に巡礼したことを聞いて大いに悲しんだ。彼は人々のあやまった信仰を思い切って断ち切ろうとし、かの神聖な樫の木を切り倒そうと決心した。そして供の者をつれてその仕事をはじめた。異教の人びとは怒りと怖れの情を抱きながら、そのまわりに立って、この冒瀆者が雷に打たれることを固唾をのんで待った。しかし彼らの面前でついに堂々たる大木が倒されるのを見た時、これまでの信仰の迷妄を悟り、洗礼を受けた。樫の樹のあったところにボニファチウスは十字架を

立て、聖ペテロに捧げる洗礼堂を建てた[33]」

樹木を神体とし、樹森を神聖なものとする古代ゲルマンの信仰は、その神木の倒れるのを防ぐことができなかった。その樹木を異教の神とみたキリスト教は、樹木を切り、森を開いて、そこに新しい礼拝堂を建立したというこの伝説は宗教の相違による自然への係わりの相違を示しているだけでなく、文明の相違をも示している。ボニファチウスはローマ教皇より派遣されてドイツに伝道にやってきた。そのキリスト教はローマの文明、都市文明の装いを帯びている。森が開かれてボニファチウスの建立した礼拝堂は恐らくローマ文明に基づく石の文化の様式である建築様式に基づいて建築されたものである。文明しかも都市文明には森への攻撃性がある。キリスト教は当時このギリシア、ローマ文明をその荷い手として、ヨーロッパ世界に拡大の手をのばしていた。そのギリシア、ローマの文明は更に先行するメソポタミヤ文明の影響を受けている。紀元前2700年に起こり、記述されたのはその6百年後ではあるが、世界最古の文字に記された神話、ギルガメッシュ叙事詩は、シュメールの王ギルガメッシュが森の神フンババの殺戮の旅に出発することで始まっている。城壁という都市文明にあるシュメールの王が、その文明維持のため、異教の神、森の神フンババを倒すというこの神話は、森の神フンババの住む森がレバノンの森であり、レバノンの森を伐採するという歴史的事実を踏まえている[34]。旧約聖書にも記されている古代のレバノンの杉は有名でうっそうと茂る森であったという。だが今日その後メソポタミヤ文明、エジプト文明、ローマ文明によって森は切り伐され、今日では全く見るべき森はレバノンには残されていない。ギリシアのアクロポリスの神殿は石造りであるが、その石柱はエンタシスとして有名である。樹木を模造したものである。都市文明は樹木を破壊して、もはや神殿を樹木によって建造することができないから、石造りである。これはローマのバジリカア建築様式も石造りであるが、その基本的構想は樹木であり森である。それにも拘わらず都市文明は森を破壊することによって本質的に成立せざるをえない。ボニファチウスのキリスト教はローマ文明をその装いとしていた。そのような歴史背景があることを忘れてはならない。ここで明らかになるのは、8世紀に於いても古代ゲルマン人の樹霊信仰がゲルマン人の間で一般的であったということである。

森と古代ゲルマンの宗教

森をどのようなものと見るか、どのようなものと意識するかは森の変遷に大きな影響を与えるものである。再びキリスト教の側から書かれた古代ゲルマンの森について見方を、M. D. ノウルズ他著の「中世キリスト教の成立」から述べてみる。「850年頃まで、ドイツでもガリアと同じく古い神々や異教の迷信が残っていたことが明らかにされている。最初のキリスト教改宗以後ヨーロッパのいなかでは何世紀も異教の習慣や思考が風土にしみついていたが、ドイツの森林は、フランスやイングランドの森以上に異教の核心に近く接していたのであろう」と[35]。

この資料は、ボニファチウスの伝説と同様9世紀に至るまで、古代ゲルマンの樹霊信仰が継続していたことを明らかにしている。更に、歴史的事実として、この樹霊信仰の時代において、ゲルマンの森「Wald」には顕著な変化がみられていない、ということである。それは社会的には、農業技術の未発達、著しい人口増加はこれもまだ見られていない、木材需要の文明による破壊の手が地理的条件により、他のヨーロッパの地方より強くのばされていなかった、という様々な背景や条件もあるが、人々の樹霊信仰という意識がこの「森」の保持に果たした意義は決して少なくないと思われる。

マグデブルクの南東にクロイツホルストと呼ばれる美しい森がある。この森について次の伝説が残されている。「この森はマグデブルクの修道院の所有であった。その森の中の神聖な樫の樹の下にある時、白髪の老人があらわれ、大司教ノルベルトにむかって、異教の神だと断わり、そ

の信奉者たちがひどく迫害されている、といって歎いた。この老人がパッと姿を消すと急に激しい嵐が起こった。このできごとをノルベルトは忘れていたが、例の森になかなか切り倒せない樫があるということを耳にしてまた思い出した。そこへ行ってみると、なるほど、斧をふり上げるごとに斧の刃がとんで行ってしまう。ノルベルト自身がやってみても、柄だけは手もとに残り刃はどこかへ飛んでいき消えてしまう。そこで大司教はこの樹により高い力が働いて守っていることを知り、樹を祝福した。それ以来その樫は神聖な樹として切り倒されることはなかった。[36]」

伝説はその成立において、必ずしも虚構ではなく、歴史そのものである。しかしそれが伝えられる過程において変貌していくことになる。その変貌の過程にその民族の特性が表明されているとみることができる。この伝説はゲルマン人の森と人間の交流をさぐるに最適の素材であるかもしれない。

ボニファチウスの伝説同様、この伝説も、地名、時期、人名もはっきりとしている。ただ時期は厳密ではないが、どちらも歴史的事実がある。片や礼拝堂が残り、片や美しい森が残っているという事実である。森が切り伐されるか、残るかは、人々の森に対する意識である。ゲルマンの人々はどちらの場合も樫の木と自己との一体感を感じ、この樫の生命の永続性を求めた。その意識を支えるものは古代ゲルマンの樹霊信仰である。ボニファチウスもノルベルトも同じキリスト教に立っているが、森にたいする意識が異なる、樫の木を異教の神としてみる意識と樫の木を祝福すべき自然とみる意識である。それを支えるのはキリスト教の信仰である。同じ信仰にしても、自然への意識において異なることにより、異なる結果が発生している。

森の保持を企かるも、森を文明のために伐採するのも、人々の意識であり、意識を形成する心性である。この心性を支えるのは信仰であり、更に宗教はこの心性を規定する。森との人間との交流に関して宗教の役割が極めて大きいゆえんである。

お わ り に

ドイツの森が著しく後退していくのは12、13世紀である。古代の終わりまで大陸の西ヨーロッパは90％近くの森林に覆われていた、といわれている。[37] 国土の90％が森林がケルト人の時代、古代ゲルマンの時代、ほとんど変わらないで維持されてきたのは、人々の意識として森を神聖なものとみてきた、樹木信仰に基づくものであろう。その90％が今日のドイツの森林率30％へと変化した。しかもその30％の森林は原生林の樹森ではなく、二次林、三次林つまり、人の手になる樹林である。このような変遷を促したのは中世であるといえる。中世のドイツは都市化の時代、そしてキリスト教の時代である。この「Wald」の後退という変遷にどのようにキリスト教は係わってきたのか、キリスト教はどのような自然観、森に対する視点を生み出していったのかを次の問題とする。

引用文献

(1) 梅原　猛、森の思想が人類を救う、小学館、1991年　P.30～32
(2) 沖縄古語大辞典編集委員会編　沖縄古語大辞典　角川書店　平成７年
(3) 小学館辞典編集部編　日本方言大辞典下巻　小学館　1989年
(4) 上代語辞典編集委員会　時代別国語大辞典　三省堂　1994年
(5) 白川　静著　字訓　平凡社　1987年
(6) アリストテレス　自然学　「世界の名著シリーズ９巻ギリシアの科学」に収録、中央公論社　1980年　P57以下

(7) Smith's smaller Latin−English Dictionary, John Murray, London, 1959, P.687
(8) 前掲書、Smith's、P.427
(9) ハリスン、R. P. 著金利光訳 森の記憶 工作舎 1996年 P.76〜77
(10) Beckmann, Roland, Des ardres et deshommes, Paris.:Flammarion, 1984, ,P.99〜136
(11) 田中秀央編 羅和辞典 研究社 1952とSmith'の羅英辞典1855年を参考にした。
(12) Manwood,John. Manwood's Treatise of the forest laws. Ed. by Wiliam Nelson.4thed. Corected and enlanged, London : E, Nutt. 1717. P.139〜140
(13) 前掲書 Manwood's P.151
(14) 前掲書 Manwood's P.151〜152
(15) Boesch, B', Zu den Ortsnamen'Der Schwarzwald. in "Schwarzwald" Bühl/Baden. 1981. 更にシュヴァルツヴァルトに関しては北村昌美編著 森林と文化 ——シュヴァルツヴァルトの四季—— 東洋経済新聞社を参考にする。
(16) Grimm, J.und W,Deutsches Wörterbuch von Jacob und Willhelm Grimm Band 27, Deutschen Taschen buch Verlag, München, 1922, P.1027
(17) ペーター・フォン・ポーレンツ著岩崎英二郎他訳 ドイツ語史 白水社 1974年 P.19
(18) ヘルマ, G、著関楠生訳 ケルト人 河出書房新社 1979年
(19) カエサル著近山金次訳 ガリア戦記 岩波文庫 1942年を参照
(20) フレイザー著永橋卓也訳 金枝篇 岩波文庫 1952年 I巻P.239〜240
(21) 前掲書 金枝篇 II巻P.33〜34
(22) 前掲書 金枝篇 V巻P.135〜136
(23) 前掲書 金枝篇 I巻P.239
(24) 前掲書 金枝篇 I巻P.240
(25) 前掲書 金枝篇 II巻P.34
(26) カエサルの前掲書 6〜25
(27) タキトウス著田中秀央、泉井久之助訳 ゲルマーニア 岩波書店 1953年
(28) 前掲書 ゲルマーニア P.134
(29) 前掲書 ゲルマーニアの10
(30) 谷口幸男、福嶋正純、福居和彦共著 ヨーロッパの森から ドイツ民俗誌 日本放送出版協会 昭和56年 P.92〜93
(31) 阿部謹也 中世の窓から 朝日新聞社 昭和56年 P.213〜214
(32) フランスの言語学者 主著「インド・ヨーロッパ諸制度語彙集」II巻 言叢社 1987年
(33) キリスト教大辞典 教文館 1963年 P.997
キリスト教史第三巻中世キリスト教の成立 上智大学中央思想研究所編 講談社 P.25〜28 P.78〜81 参照
(34) ギルガメッシュ叙事詩に関して
Pritchard, James Bennet, ed. Ancient Near Eastern Texts Relating on the Old Testament, Princeton : Princton University Press, 1969. P.47〜50
(35) ノウルズ、M、D、他著橋口倫介監修キリスト教の成立 講談社 昭和58年 P.82
(36) 前掲書 ヨーロッパの森から P.92〜93
(37) ジャック・ウエストビー著熊崎実訳 森と人間の歴史 築地書館 1990年 P.60